

松尾一義さん

○被災した記憶

当時アメリカ軍は焼夷弾を落としており、周囲が延焼してしまうので、私は長崎造船所に勤める父の社宅がある長与村へ疎開しました。

私は長崎市から7キロメートルくらい離れたその疎開先で被爆しました。7歳と11か月でした。

被爆した時は、午前11時前後で、6畳間に3歳年上の兄と4歳年下の妹と昼食を待っていました。昼ごはんと言っても米ではなく、代用食であるサツマイモを母が台所でふかしていました。

ふかし終わった頃に、突然ものすごく明るい白い閃光が窓から差し込みました。その時、母が驚いて「こっちに来なさい」と大きな声で叫びました。母、兄、妹、自分の4人は、6畳間の白い壁のところに隠れましたが、下から突き上げるような「ドーン」という衝撃を受けました。その後、爆風が来て窓ガラスが粉々に吹き飛びました。小さい頃の記憶ですが、これで地球はダメになったのかなと私は思いました。それくらいの衝撃でした。壁の上部に吊るした20個ほどの玉ねぎ、額に入れて掛けていた天皇皇后陛下の写真、振り子の柱時計もありましたが、全て衝撃で落ちました。当時は夏休みで、私達はランニングと半ズボンだったので、6畳間に座っていた時の母の一瞬の掛け声が無かったら、恐らくガラスの破片が刺さっていたと思います。母の掛け声があったから助かったのです。

私達4人は、それから夕方まで辛抱していたのですが、暗くなる頃、500メートルくらい離れた山へ行き、そこの防空壕に入りました。その防空壕には、既に12人くらいの人が入っていました。そこで夜中の12時前後までじっとしていましたが、そろそろ家へ戻ってもいいんじゃないかということで家へ戻りました。

しばらくして、明け方に父が帰宅しました。原爆投下の時間からすると、父は何十時間もかけて歩き、帰ってきたことになります。長崎市が被爆して、市内には遺体が転がっており、その遺体は顔も分からないくらい酷い状態だったこと。「助けてくれ」「水をくれ」と色々なことを声掛けされたけれど、家に帰りたい一心で大変なところを山越えして、歩いてきたこと。父はその状況を全部話してくれました。それを聞きすごく大変なことが起きたのだと衝撃を受けました。

負傷した人達が毎日毎日軍用トラックで小学校の運動場に運ばれてきました。各教室、体育館に収容されるのですが、その姿はもう見ていられないような火傷でした。ケロイドは溶けるんです。私も教室を見に行きましたが、もうすごい状

況で、つける薬も無いんです。その状況で寝かせられたり、壁に寄り掛けられていたりしていたので、教室の床に血だまりが出来ていました。各教室、体育館はどこもいっぱいでした。そして、どんどん亡くなっていくので、運動場に1メートルくらいの丸太を組み、遺体を並べ、4段くらい重ねて焼くのです。私はやることがないので毎日見に行きました。

人間が死んで焼かれていく状況は、普通では当然見ないし、考えられない状況ですが、私は毎日見ていました。生々しい話なのですが、毎日続くと慣れるというか、怖くもなく「また今日も焼かれていくのだ」と思う毎日でした。

今後日本がどうなっていくのだろうと思いました。原爆投下からその間、子どもながらに衝撃を受けました。

原爆投下で街が焼け、夜だから真っ黒なはずなのに焼ける熱が空を赤く染めていました。6日間くらいは真っ赤だった記憶があります。私は「おば」を訪ねて6日後に入市するのですが、市内に入った時に一番記憶に残っているのは、人の髪が焼ける強烈な臭いです。焼き芋を持って行ったのですが、食べる気がしませんでした。また、食べ物を食べてもみんな下してしまう状態が6日くらい続き、私はこれで死んでいくのかなと思いました。徐々に回復はするのですが、黒い雨も降っていましたし、体は弱り、髪の毛も抜けていきました。体もやせ細っていき、後にこれが急性原爆症だと知りました。

○子どもたちに伝えたい事

戦争の体験を通じて平和と命の大切さを今の子どもたちに伝えていきたいと、思います。こうした思いが核兵器の廃絶につながるものと思います。

平和の根本には話し合いがあります。アメリカでは、子どもの頃から話し合いが十分にできるように討議をやっています。日本にはあまりありません。そのため、子どもの頃から意見をどんどん言い合うことを、小学校から植え付けていくことが大事だと思います。